



## 恋の歌

百人一首のNo.20～40には、興味深い恋の歌がある。今回はそれを紹介しよう。

まずは『クイズでわかる百人一首』から。

○忘らるる身をば思はず誓いてし  
人の命の惜しくもあるかな（右近）

問題1 「誓いてし」はどう誓ったのか。

- ①行く末まで私を忘れないと
- ②忘れるようなことは思いはしないと
- ③私に忘れられるようなことはしないと

問題2 「人の命の惜しくもあるかな」とあるのはなぜか。

- ①私に忘れられて嘆き死ぬから
- ②私を忘れた罪は死に値するから
- ③誓いを破った人は神罰で死ぬから

ところで、この歌は何句切れ？ ちょっと迷うところはあるが、「思はず」の「ず」を終止形と考えて二句切れがイイと思う。「ず」は連用形の可能性もあるが、ここで切った方が力強い歌になる。「誓いてし」の「て」は完了、「し」は体験過去。さて、答えは問題1が①、問題2が③である。

「忘らるる身」は、「るる」が受身で自分自身。「人の命」の「人」は相手である。つまり、私はあなたに忘れられてしまったが、忘れないと誓ったあなたは、その誓いを破ったのだから死ぬことになるでしょう、惜しい命だこと…という歌である。恐ろしい…と思いきや、多くの注釈書は「わたしのことはどうでもいいの、あなたのことが心配なの…」と、相手を真剣に気づかっているのだという解釈を支持している。諦めの美学だそうな。

\*

○忍ぶれど色に出でにけりわが恋は  
ものや思ふと人の問ふまで（平兼盛）

○恋すてふわが名はまだき立ちにけり

人知れずこそ思ひ初めしか（壬生忠岑）

この二首を巡っては有名な逸話がある。この二首は、村上天皇が主催した「天曆御時内裏歌合（一般には天徳内裏歌合）」（960年）の際、「忍ぶ恋」（人に知られないように心に秘めた恋）という題で番えられた。「歌合」とは、歌人を左右の2グループに分け、同じテーマ（題）で詠んだ歌をそれぞれから出し合って、歌の優劣を競うゲームである。友だち同士でやる軽いものもあるが、これは天皇主催だから、歌人たちはそれぞれのプライドをかけて歌を番わせたに違いない。

さて、勝負を決める判定役をつとめる人を判者というが、この二つの歌はどちらも素晴らしく、優劣がつけられずに困っていた。すると、天皇が小さなお声で「忍ぶれど」の歌を口ずさんでいるのが聞こえてくる。判者は「ああ、天気（＝天皇のお気持ち）は兼盛の歌の方にあるようだな」と考えて、兼盛を勝ちとしたというのである。

ちなみに、この話には後日談まである。負けた忠岑の方は、すっかり落胆して食欲も失せ、とうとう病になって亡くなってしまったという（『沙石集』）。まったくの作り話ではあるが、当時の歌人たちの詠歌に対する執念のほどが垣間見える逸話である。

前に歌の「色」は、目に見える態度や素振りのこと。詠嘆の「けり」が終止形で二句切れである。後者は三句切れ。下の句の「こそ～已然形」の係り結びが、逆接のニュアンスを帯びていること、そして、倒置となって上の句へと結びつくことを勉強しておこう。